溶接ニュース
産報出版株式会社
東京本社
東京都千代田区神田佐久間町1-11
産報佐久間ビル　（〒101-0025）
電話03（3258）6411代表
FAX03（3258）6430
関西支社
大阪市浪速区元町2－8－9
難波ビル　（〒556-0016）
電話06（6633）0720代表
FAX06（6633）0840

溶接1日体験記（本紙記者がポリテクセンター関西で溶接に挑戦）

人生2度目、最初はおそるおそる
音の重要性発見、上達のヒントに

溶接技能者をめざす求職者（離職者）向けに開講されている「独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構大阪職業訓練支援センター・関西職業能力開発促進センター（ポリテクセンター関西）」の「溶接技術科」は、年4回の募集に対し毎回定員15人が満員になる盛況ぶりだ。本紙記者は同センターに「1日体験入学」し、訓練生とともに実技を通して溶接の基礎などを学んだ。

当日は8月期入所組と11月期入所組の計30人が、被覆アーク溶接「中板・下向・裏当て金あり」の突合せ溶接の課題に向き合っていた。午前9時、安全点検に続き2人1組で一つのブースを使い練習が始まる。被覆アーク溶接のブースが埋まっていたため、記者は半自動溶接機を使って溶接を始めた。

「じゃあ、やってみますね」。腰を落とし安定した姿勢で直線のビードを生み出す伊東指導員のお手本に続き、生涯2度目となる記者の溶接体験が始まった。まずワイヤと母材を接触させてアークを出す。「パチッ」とワイヤが跳ね上がり先端が丸く固まった。「こうなるとうまくできないから」とペンチで丁寧に切る伊東指導員。パチパチとトーチを進めるものの、うまく進まず音も粗い。早くも溶接の難しさを感じ汗がにじみ出てきた。

「その体勢ではトーチの先が見えないでしょ」。伊東指導員の指摘を受け体勢を変えて再開する。遮光面越しに見る溶融地はアメーバのような動きだ。最初の1パスをなんとかこなしたーと思ったが、できあがったビードは弱々しかった。

トーチの角度や溶接姿勢の助言を受けながら練習を繰り返す。ここで思い出されるのは伊東指導員の言葉。「繰り返しやれば必ずうまくなるかというとそうではない。どうすれば上達するのか。考えながらやらないといけない」

頭をフル回転させ考えながら試行錯誤し溶接を続ける。次第に「音」が安定した溶接基準の一つだと分かってきた。音とアークができるその先を意識しながら続けている。だが、なかなか美麗にはならない。

「ではウィービングをやってみましょうか」。課題は早くも次のステップに移った。伊東指導員が示すお手本は、トーチがまるでステップするように動いている。リズム感を意識して記者もチャレンジ。トーチの切り返しの際のテンポを意識した。「どんな時代が来たが、ビードは大きくぶれてしまった。

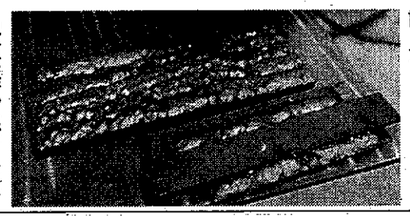
一息ついたところで溶接経験があるという31歳の訓練生の溶接をじっくり見た。落ち着いた動き、母材についたゴミを払いのける仕草に余裕を感じる。溶接の進むスピードはゆっくりで音も安定している。見ていたほかの訓練生も「上手ですね」とつぶやいた。

その残像を頭に入れ記者も再チャレンジ。もうアークで驚くことはないが、「うまくできる」ところまでいかない。数人の訓練生に助言を求めると、「（ジグザグの波が）粗い」「もう少しゆっくりと」「もっとトーチを立てて」「トーチと母材が離れすぎ」と多くの指摘。だが、思うように実践できずもどかしい。ただ、何度も繰り返した後のビードを「さっきよりはいいんじゃないですか」と少しほめられると、思わず笑みも。

「溶接技術科」の訓練生は多くが溶接未経験者。以前はスーパーで働いていたというTさん（40）は父が溶接技能者だったことから溶接に興味を持った。「どんな時代が来るか分からないが、溶接は絶対必要だという気持ちでやっている」と話す。美容室経営者だった31歳の男性は、ハローワークで勧められ溶接技術科を受講。「みんな上手だと言ってくれるが、まだよく分からない。国の事業として機会を得て受講しているので、何としても形にしたい」と決意を口にした。

元溶接技能者の訓練生もいる。Nさんもその一人で、「ここは理論立てて説明してくれるので上達している実感がある」と充実感を口にする。別の元溶接技能者の訓練生も「材料の種類や母材の温度を勉強できる。基礎から教えてもらうことで、5年10年かかって覚えていたことを大幅に短縮できる。こうした場をもっと広く活用した方が社会にとってもいい」と話した。

伊東指導員


記者が作ったビードには訓練生の厳しい批評がとんだ

訓練生は互いのよい点、改善すべき点を助言し合いながら練習を続ける。記者も訓練生に手ほどきを受け、「考えながら」「反復練習を繰り返す。受講生の目標は翌月に控えたJIS検定を取得し、そして早期再就職すること。それぞれが目標を見据えながら、一つひとつの課題に向かい合う。

◇

真剣なまなざしの訓練生とともに過ごした記者の1日体験は、こうして終了した。まだビードを作り出すことに精一杯で、溶接の奥深さを感じるまでには到達していない。ポリテクセンター関西では同じ境遇の者同士が支え合いながら溶接を学んでいる。こうした環境は、訓練生にきっとプラスに働くだろう。

同センターでは、溶接の勘どころを学ぶ「実践技術」など在職者向けの溶接関連セミナーも随時開催している。セミナー受講者にティグ溶接などを指導している後藤指導員は、「企業が存続していくためには人材育成が大事になる。そこに貢献したい」と話している。

ポリテクセンター関西は各種の溶接関連セミナーを実施

西尾指導員のコメント

当センターの「溶接技術科」は一時廃止されていたが、溶接の重要性が再認識され2011年2月に復活した経緯がある。訓練生の多くは溶接未経験者だが、12年7月修了生の就職率は92・9％（修了3ヵ月後時点）と高い。

最終目標は就職することで、簡単にいくことではないが、同じ境遇の仲間と一緒に助け合って修了するまでに就職を決めてほしい。ここに来ている人は、多かれ少なかれ人生の不遇の時にある。受講生にはここに来てよかったなと思って新しい職場に行ってもらいたい。それは就職することと同じくらい大事なことかもしれない。

訓練生の内面を知るため、休み時間や授業終了後はできるだけ話す時間を作っている。修了式の時に「先生ありがとう」と言われると自分の存在意義を確認できる。人からお礼を言われることで、生きている意味を確かめているのかもしれない。